

# ダイス神様のお導き（泣）

名無しのごんべい

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

『転生者は自分が新たな生を得たことに気付き、既に前世の自分が死んでいることに気付いた転生者は現在の自分の状況に恐怖した。S ANチエックどうぞ』

「やめろやこのやろおおおおお!!!」

そんな感じのお話。

\*オリ主の行動はダイス神様によって決まります。

\*ダイスの振り直しは無しです。

\*詳しくは注意事項をお読みください。

## 目次

SANチエックから始まる第一話	1
キャラクターと注意事項	4
ダイス神様と一緒に第二話	7
初接触と第三話	11
なのはちゃんと銀髪君と一緒に第四話	16

## SANチエツクから始まる第一話

「おはようございますー!」

そんな声で目が覚めた。

「……もう朝か?」

はて? 自分はいつの間に寝たんだろうか? 確か近所のコンビニに弁当を買いに行ったことは覚えてるんだが……。

「はい! これからあなたの夜明けが始まるんです!」

そんな声に振り向く。

天使がいた……。いや、比喻でも冗談でも何でもなく文字通り天使がいた。

「改めておはようございます! こちらは転生者管理センターです! 今回、貴方は人類死亡カウンターのキリ番目で死亡してしまいましたので転生……あなたの世界のサブカルチャーで言う所謂『神様転生』を行ってもらいます!」

混乱している中で告げられる言葉。転生者管理センター? 人類死亡カウンター? 何を言っているんだ?

「おや、混乱しているようですね。ですがご安心ください! 要約すると『死んだけどもう一回別の世界で人生を楽しめるぜ!』ってことです! ではここからは転生後の設定をします! 転生後の世界は『魔法少女リリカルなのは! 得点は三つまでで原作キャラと同じ年でスタートです! では特典は何にしますか?」

いきなりそんなこと言われてもな……こりや夢か? そう言う系の物を見すぎて夢にまで出てくるようになったのか? なら楽しむか。

「じゃあ……『魔法の才能』と『デバイス無しで魔法を使える才能』。あと、『NTのような直感』の三つで」

「はい! 転生後の再設定はできませんがよろしいですか?」

「はい」

「ではちよつと待ってくださいね?」

そう言つて天使はどこからともなく机を呼び出してその上で何か

作業を始めた。

コロ……コロコロ。

そんな音が静かになった空間に響く。

「はい、決まりました！ 『魔法の才能（82）』！ 『デバイス無しで魔法を使える才能（30）』！ 『NTのような直感（12）』です！」

「いやまて、その（ ）の中身は何だ？」

あつれー？ なんかそんな表記どこかで見たことあるような気がするぞー？

「いやー、最近は『王の財宝』とか『無限の剣製』とか『ベクトル操作』とか『世界』とかチート能力ばかり見てたんで久しぶりに普通の特典を見ましたね！ お礼にこれを差し上げます！」

そう言つて天使は俺に手を差し出す。流されるままに受け取つたそれは……。

サイコロだった。

「……え？ なにこれ？」

「それは『ダイス神』！ とつても素敵なモノなんですよ！」  
なんだろうか？ 名前にそこはかとなくフラグ臭を感じる。

と思つたら頭の中に声が響いてきた。

『転生者はこの世の物とは思えない存在を目の前にし無意識のうちにその存在に恐怖した。SANチェックどうぞ』

『SAN値（40↓43）』

『失敗。1D3の喪失ロールどうぞ』

『（1D3↓1）』

『SAN値40―1＝39』

はあ!?

「え!?! ちよい待ちこれホントにいらナイ!」

「では、転生後の設定を終わります。良い来世を!」

「まっつてええええええええええ!!!」

た。そうして、俺の危険と魔法とダイスにまみれた新たな人生が始まった。

# キャラクターシートと注意事項

陸奥 転我 (9)

転生者

STR (筋力)

CON (頑健)

POW (精神)

DEX (敏捷)

APP (外見)

SIZ (体格)

INT (知力)

EDU (教育)

アイデア

幸運

知識

正気度

最大正気度

耐久力

マジック

ダメージボーナス

リンカーコア

場合AAA)

特典技能

魔法の才能

魔法暗算

NT

運転 (自動車)

応急手当

回避

隠れる

機械修理

11

12

9

10

10

10

13

12 (転生者のため前世補正)

65

40

60

40

99

16

9

4 (物理のみ)

897 (魔力ランク17段階D100。この

82 (魔法の成功率)

30 (デバイス無し魔法成功率)

12

5%

5%

50%

40%

10%





6000～6999 ||SSS+  
7000～ ||SSS

\*あくまでこのSS独自の設定です。

プロフィール

転生者。謎に包まれた転生者管理センターによって転生を果たした。彼がこの後どう原作に関わっていくのかはダイス神様のお導きしだいである。

TRPGは某動画サイトでリプレイ動画を見たくらいで実際にやった経験は無し。だけどだいたいこのルールは把握している。

なのはアニメ全て視聴済み。劇場版も見ており、一番好きなのはForce。自他ともに認めるユーナの派であり、今のところ原作キャラとイチヤイチャしたいと言った思いは無し。本人にとっては(ユーノ君となのはちゃんのイチヤイチャを間近で見れたらなー)程度である。魔法の才能を特典に選んだのも魔法があればなのはとユーノと自然にいつしよにいれるから。

ダイス神様を渡されるのは完全に予想外であり、ダイス神様に特典の性能を決められたのも予想外である。これからこの子がどうなっていくのかはダイス神様しか知らない。

ダイス表記

技能 技能値 ダイスの目

SAN値 ( 40 ↓ 43 )

この場合は失敗であり喪失ルールを振る。

技能 技能値 ダイスの目

SAN値 ( 40 ↓ 33 )

この場合は成功であり喪失は無し。またはダイス神様に決められた固定値喪失。

これから恐怖のダイスロールが始まるのだ！ 恐れ慄け！

## ダイス神様と一緒の第二話

やあ！ 転生者の陸奥転我（むつてんが）です！

長かった……やっと9歳まで来れた！ これまでの俺の苦勞の連続をダイジエストでどうぞ！

「オギャア！ オギャア！」

原作キャラと同じ年って赤ん坊からかよ！ って言うか夢じゃねえのか!? 俺マジで死んだのか!?

『転生者は自分が冗談でも何でもなく既に死亡していることに気付き、にも拘らずこうして再び誕生したことに例えようのない恐怖を感じた。SANチェックどうぞ』

おい待てや！

『SAN値（39↓94）』

『失敗。1D6の喪失ロールどうぞ』

でけえな！ じゃなくてやめろ！

『（1D6↓6）』

『SAN値39―6＝33』

『一度に5ポイント以上喪失のためアイデアロールどうぞ』

『アイデア（65↓57）』

ぎゃああああ!?!

『成功。狂気の内容をロールします』

『(1D10↓4)』

『早口でぶつぶつ言う意味不明の会話あるいは多弁症になります。  
ロールプレイどうぞ』

できるかあ!? こちとら赤ん坊じゃあ!!

「転我ー、ごはんですよー!」

「ご飯……つまり授乳ですよ。前世だったら興奮できたんだろう  
けど今の俺ではただただ羞恥心がガガガガガ。」

「はーい、よしよし」

「あゝ……抱き上げられると安心するんだよなあ。これが母親か  
……。」

『転生者は母のぬくもりで精神が安定した。1D10で正気度回復  
ロールどうぞ』

え? マジで!? ダイス神様やつさしー!

『(1D10↓6)』

『SAN値(33+6=39)』

おっしやー!ー!!

「さあ、たーんとお食べ?」

ツと、そうだそうだ飯だった。

『技能判定』

はっ.

『乳吸い(80↓1)』

『クリティカル。転我はうまく授乳を終え満腹になった。満腹になったことで心に余裕ができた。1D3でSAN値回復ロールどうぞ』

『(1D3↓3)』

『SAN値(39+3=42)』

……え？ こんなことまで判定すんの？ って言うか乳吸い技能ってなんだよ！

『乳児の時だけ使用可能な技能。初期値80』

なんだそれ!? いや、まあSAN値回復したからいいけどよ……。なんか納得いかねえ……。

『技能判定』

『二足歩行(30↓90)』

『失敗。転我はうまく立てずに転倒した』

いてえ！ っていうかあぶねえ！ もう少してフアンブルじゃねえか！

「ああ、転我大丈夫か!？」

「やっぱりまだ立つのは早いんじゃないかしら？」

「かもなあ」

あと1ヶ月くらい待ってください。

まさかまた幼稚園に通うことになる何て……。まあ童心に帰るのもいいか。

『転我はすでに卒業したはずの幼稚園にまた通うことになったことに

関して名状しがたい恐怖を感じた』

感じてねえ！

『SANチェックどうぞ』

『SAN値（42↓61）』

『失敗。1D3の喪失ロールどうぞ』

『（1D3↓2）』

『SAN値（42→240）』

初期値に戻ったじゃねーか！ どういう事だよ！

……ここまで、ながかったなあ……。

## 初接触と第三話

幼稚園の時、友達にキャッチボールを誘われたことがある。

「おれ、しょうらいはやきゆうせんしゅになるぜ！」

「おう、頑張れよ」

『技能ロール』

『投擲ロール。ゆっくり投げているため30の補正』

『投擲（25+30↓25）』

なんてキャッチボールするたびに技能ロールしなきゃならんのだ……。いい加減慣れてきたこととはいえ、いつ失敗するかヒヤヒヤする。

「おまえはなにかないのか！」

「何も考えてないなあ」

『投擲（25+30↓14）』

って言うかいつの間にか夕暮れ時か……そろそろ帰らないとな。

「次で最後にしようぜ」

「おう、こい！ ぜんりよくでな！」

そう言つて野球選手を夢見る園田君は腰を落として捕手の構えをとる。

そこまでされては俺も応えねばなるまい。

「おっしや！ 行くぜ！」

『投擲ロール。全力投球のため補正無し』

あ。

『投擲（25↓72）』

『失敗。幸運ロールどうぞ』

『幸運（40↓32）』

『成功』

俺が投げたボールはあらぬ方向に飛んでいった。

ふう、よかつた。幸運ロールに失敗してたらどうなっていたか……どっかの窓に突っ込んでたかもな。

「どこなげてんだよー!」

「ごめん! 取ってくる!」

そう言っただけはボールが飛んでいった方に走る。そこは公園の端のブランコ。一人の少女の前に二人の少年が陣取っており、ボールは少年たちの間を転がって少女の足にこつんと当たってから止まった。

「ごめん! 怪我してないか!」

そう言いながら駆けよると、少年たちがこちらを振り向く。

……ないわー。これ絶対転生者だわー。だって片方銀髪オツドアイの超絶イケメンでもう片方がこれまた整った顔立ちの赤髪イケメンさん。そして俯いて顔がわかりにくいがああ揺れるツインテールはなのはちやんだらう。

つまり、俺はテンプレに関わってしまったと言う事である。

「あ? なんだてめーは?」

踏み台臭のする銀髪オツドアイが俺を睨む。赤髪も口には出さなけれど何か言いたげだった。

「いや、ごめんな。キャッチボールしてたら投げそこなっちゃまって……」

「ふん。なんだモブか」

「おい、なんで君はそんな風に見下すんだ。良くないなあ、そういうのは」

「知るかよ! 俺が何しようが俺の勝手だ! 指図すんなよモブ!」

おーおー、オリ主と踏み台が言い争いをはじめちゃった。

どうしようかと悩んでいる中でふと一言も話していない少女を見ると、目が合った。

するとおそらくなのはちやんと思われる少女は足元にあったボールを拾って汚れを払うと俺に差し出してくる。

「はい、どうぞ」

「ありがとう。当たったりしてないか?」

「ううん、ころがってきたし止まりかけだったから大丈夫なの」

少女からボールを受け取るついでに世間話。これが二次創作でよくある漁夫の利である。

「あの二人は友達？」

今だに言い争いを繰り広げる二人を見ながら聞く。すると少女は困惑気な表情になる。

「ううん、ちがう。1人であそんでたらいきなりきたの。そしたらそのままケンカしはじめちゃって……」

なんとテンプレ。大方寂しくしているのはちゃんと幼いころからフラグを立てようと思ってたんだらう。だが、俺がいる限りそうはいかん。ユーなの以外は認めない！

「なら、このまま帰っちゃえばいいんじゃないか？」

「え？ でも……」

そんななのはちゃんの視線は再び二人の方へ。おそらく喧嘩している二人を放っておけないと言ったところだろうか？ そうだとしたら優しい子である。

「あの二人なら俺が仲直りさせるよ。それに時間も遅くなっちゃうしお母さんとかが心配するんじゃないか？」

そう、この時期のなのはちゃんを考えれば少し意地悪な言い方をする。

確かこの時期のなのはちゃんは家のことで手いっぱいな家族に心配を掛けたくないと言う理由で必死にいい子になろうとしていたはずだ。そんなこの子にこういえば……

「それはだめ！ ……でも、ほんとうにいいの？」

「ああ。任せろ！ こう見えて、俺は仲直りの達人だ！」

ビシツとポーズを決めながら言う。気分は武装錬金！ 転生特典核鉄でもよかった……だめだ、ファンブルが怖い。

「ふふっ、なにそれ！」

そう、なのはちゃんは笑みをこぼす。そしてお礼を言いながら帰っていった。

さて、あとこの2人だが……

「おいモブ！ なのははどうした!？」

ん？ 気付いたか。さて、どうしようかね。

『選択』



は？

『説得。言いくるめ。キック』

おい、最後待て。

『1D3でロール。1なら説得、2なら言いくるめ、3ならキック』  
「まて！ ダイスロールはそんなことの為にあるんじゃない！  
待ってくれ！ マジ待ってお願いせめて二択に……。」

『(1D3↓1)』

セエエエエエエフ！ セエエエエエエエエエエエエエエエフ!!!

『説得ロール。初期値15』

まだピンチは続くと言うのか!! 畜生!!

『説得(15↓33)』

「ですよー。知ってたよ。ごめんねなのはちゃん、仲直りの達人にはなれなかったよ。」

「おい、何とか言ったらどうなんだよモブ！」

胸倉掴まれた。勘弁してくれ……。」

「あの子ならもう帰ったよ……。」

「あんだと!? てめえ!!」

「おいやめないか。君はそんな子供にまで手を出す気か?」

「あなた達も子供なんですがそれは……いや、頑張ってくれオリ主君！ 君の行動に俺が無傷で帰れるかどうかがかかっている！」

「うるせえな、俺に指図すんなって言ってんのがわかんねえのかモブ……。」

「そんな銀髪オッドアイの両手にはあら不思議、いつの間にか夫婦剣が！ 『無限の剣製』かよ。『王の財宝』じゃねえのかよ。」

「それを持ち出すとは……よくないなあ……。」

「そんなオリ主君の手にはいつの間にか携帯電話。そして腰にはベルト。……なるほど、カイザになった奴は心まで草加っていくんだ！  
オリ主君のようにな！」

『転我はいきなり目の前で幼稚園児が殺気をむき出しにして殺し合いを始める光景に恐怖を感じた。SANチェックどうぞ』

だー！ ふぎけんなよおらー！

『SAN値(40→98)』

『失敗。SANチェックの為フアンブルは無し。1D6の喪失ロールどうぞ』

『(1D6→1)』

『(40→1||39)』

これが振出しに戻るってやつですね、わかります。誰かこのダイス神様叩き壊してください。

「おい！ てんがー？ ボールまだかー？」

「悪い、今行く！」

おっと、園田君が呼んでいる。じゃあねお二人さん！ 俺は逃げる！

『逃走判定。DEX×5でロールどうぞ』

おい、バカやめろ。叩き壊してなんて言ったの謝るから！

『逃走(10×5→13)』

『成功』

うおおおおお!! もうこんな生活嫌だああああ!!

って言っても小学生に上がった今もダイス神は俺と共に有った。



くらいはダイスのこと忘れたかった……。

そんな授業が終わって昼休み。お弁当の時間でございます。

『技能ロール』

は？ なにを？

『幸運ロール』

『幸運（40↓92）』

『失敗。転我はお弁当を家に忘れてきた』

はあ!? ちよい待ち俺ちゃんを入れて……まじだ。ない……俺の  
弁当……ない……。

「てんがー。どうしたー？」

「弁当忘れた……」

「あらら……がんばれー」

畜生。園田君は薄情だ。

「えー……と、あのー……」

「ん？」

俺がショックで打ちひしがれていると、話しかけてきた子がいた。  
顔を上げてその子を見ると、そこにいたのはなのはちやんだった。  
あれ？ 同じクラスだっけ？

「その、仲直りの達人さん……だよね？」

仲直りの達人？ ああ、そう言えばそんなこと言ったな。

『技能ロール』

ダイス神よ、あなたは何がしたいんですか？

『記憶ロール。INT×5でロール』

『記憶（13×5↓73）』

Oh……。

『失敗。転我は目の前の少女を覚えていなかった』

いやいや覚えてないって、現に俺はこの子と会った時のことをしっ  
かりと……あれ？ えーつと？

「……ごめん、誰だっけ？ どこかで会った……とは思っただけだ」  
あつれー？ さっきまで覚えてただけ……マジで誰だ？

「あ、うん。そうだよ。一回だけしかあつたことないし、ちゃんと自  
己紹介してないもんね」

そう言うとき女の子はコホンと一つ咳ばらいをした。

「わたし、高町なのは。覚えてないと思うけど、小さいころあなたに助  
けてもらったことがあるの。だから、お礼が言いたくて……ありがと  
う」

「んー？ わからんけど、どういたしまして」

すごいなこの子……もとい、なのはちゃん。この年で不自然なくら  
い礼儀正しい……。前世でもこんな小学生見たことねえ。

って言うかなのはって主人公じゃねえか！ いくら生で見たのは  
初めてとはいええ、わからないとはなあ……まあ無印を見たのはもう何  
年も前のことだし転生してから見てないから仕方ない……。のか？

「ってそうだ。名乗られたからには名乗り返さないとな。俺は陸奥転  
我。何を隠そう、俺は弁当を忘れる達人だ！」

「あ……ふふつ。うん！ よろしくてんが君！」

よしよし、つかみはOK！ 今度からこの武装錬金式自己紹介は初  
対面の時にやっておくことにしよう。

「お弁当忘れたの？ 私のあげようか？」

「いいのか？ いやー助かったよ。腹ペコのまま次の授業受けるのは  
辛いから」

いやーほんと優しい子だ。こういう子が癒しって言うんだろうね。

『転我はなのはと接して心を癒された。成功1、失敗0のSAN値回  
復ロールどうぞ』

『SAN値(39→24)』

『成功。1の回復』

『SAN値(39+1=40)』

マジで!?! やった！ なのはちゃん天使か！

『続いて幸運ロール』

はい？

『幸運（40↓61）』

『失敗』

……いつたいなにが？

「おーい！　なのはー！　飯食おうぜー！」

そんな声とともにガラリと教室の扉が開く。

そこにいたのは……銀髪、イケメン、オッドアイのテンプレ3拍子が揃った少年。どう見てもテンプレ踏み台です。本当にありがとう  
ございます。

「あん？　なんだモブ？　どけよ」

そう言いながら銀髪オッドアイは俺を睨む。睨み返してやろうか？

「は？　なんで？　ここ俺の席なんだけど」

「知るかよ。いいからどけ、ただのモブが出しやばってんじやねえ」

テンプレ過ぎて怒る気にもならん。というかこいつ恥ずかしくないのか？　俺ならこの状態で羞恥心で死ねるね。もしくはS A N  
チエックはいる。

『技能ロール』

「またですか？　今度は何だ？　説得か言いくるめか……出来れば  
高い説得でお願いします。」

『心理学ロール』

「なんで!?　あ、俺が「恥ずかしくないのか？」なんて思ったからか  
!?　今振る意味なくね!？」

『心理学（初期値5↓??）』

『非公開。転我は目の前の少年はカルシウムが足りないんじゃないか  
と思った』

「カンケーねえ！　なんで俺が銀髪オッドアイのカルシウムの心配  
をしなきゃならんだ！」

「おい、聞いてんのかモブ！」

「ああもううるせえな！　めんどくせー！」

「ハイハイ……高町……でいいか？ 弁当ありがとな。気持ちだけ受け取っとくわ」

「あ……うん。なんか、ごめんね？」

「いやいや、俺の方こそごめんな。いこーぜ園田君」

「え？ おれかんけない……」

すまないのはちゃん。ここで助けたりしてフラグが立ったりしたらユーなのが見れないんだ！ けどむかつくことはむかつくから銀髪オツドアイ君には少し悪戯させてもらおう。

なのはちゃんに夢中になっている銀髪オツドアイに見えないよう、園田君の机を借りてノートのページを破ってちよちよいと一筆。

そして気付かれないように書いた紙を持って銀髪オツドアイの後ろに。

『技能ロール』

知ってた。どんと来い！

『忍び歩きロール（話に夢中のため補正+20）』

『忍び歩き（40+20↓32）』

『成功』

これで良し。流石俺。

教室を出る時に振り返るとなのはちゃんと目が合ったので一度手を振ってから教室を出た。

にしても、なんでなのはちゃんは俺を知ってたんだ？ 昔会ったとか言ってたけど……。

『技能ロール』

『記憶ロール。INT×5でロール』

おお、これは助かる。つまり勘違いじゃないってことか？

『記憶ロール（13×5↓84）』

『失敗。転我は昨日の晩御飯が何か思い出せず歯がゆい気分になった』

失敗かってなんでや！ 晩御飯関係ないやろ！

その日、背中に「俺がさいきょうの小学生、銀髪だ！ もう一度やるか!？」と書かれた張り紙を張り付けたまま残りの半日を過ごした銀髪オツドアイのイケメン小学生が居たそうなの。